



## ： 卷 頭 言 ：

### 21世紀の雑草管理

茨城大学農学部教授  
フィールドサイエンス教育研究センター長 佐合隆一

団塊世代である私たちの幼少の時代には、農家は牛車で荷物を運び、自転車が貴重品であり、現在ある電化製品はほぼ何もなかった。この60年間における科学技術の進歩は急速であり、驚異的である一方、人間の精神的側面は変わらず、「幸せ」を感じられないことへの疑問が取りざたされている。プータンの国民総幸福量の考え方、わが国で年間3万人を超える自殺者や精神的な病が増え続けている現実をいつも考えさせられる。このギャップは、革新的技術が、人間形成に必須の要素である伝統的な価値観と合致しないところで進歩を遂げていることと無関係でないと思う。また、こうした人間性や道徳観、これらを支えてきた宗教が、この60年間の日本の風土の中で軽んじられてきたことも一因ではないかと思う。

私がアメリカで除草剤耐性遺伝子導入作物(GMO)を栽培している農家を案内していただいた時に、「今の若い者(農家)は畑を見て回らないから、何もわかっていない。長靴の足跡が作物の肥やしなんだ」とか「GMOで10年以上グリホサートのみで防除できたので、抵抗性雑草が出現しても、何の除草剤をどう使うかを分かる若い者がいない」という話があった。日本の農家もほぼ同じ状況ではないだろうか。「一発処理剤一回で効果があれば、その後田の中に入る必要がないし、成分がどうであれ、効くと言われる製剤を散布すればそれで良い」「今自分の田んぼで、何の雑草が発生していて、その雑草が発生(顕在化)する前に除草剤で枯殺されている現実を知らずに済んでいる」。これは農業技術の進歩として目指してきた方向であるが、「人間疎外」そのものではないか。

一方、卒業生の中に自分が管理している水田で、稲に向かって歌っている学生がいた。今芸

術家として活躍している彼女は、作物に話しかけることで心が癒され、作物にも良い効果を生むと信じていた。また、「作物を育てるために、雑草を人力で抜くことに苦労はないですよ」という農家もいる。経済性という価値観で簡単に評価できない農作業にこそ人間性をみることができるのである。

戦後60年余り、高度に科学技術が発達した社会の中で、雑草防除技術も驚異的な進歩を遂げた。「除草剤」という道具に、パソコンや携帯電話と同様に人間は使われているのではないか。同様に、一網打尽的な「刈払い」や、非選択的除草剤を連続的に散布している。こうした除草は、より除草が困難な「大型で見栄えの悪い草種」が優占化し、「小型で見栄えの良い在来草種」が減少する植生になると分かっているにもかかわらず、「道具」に使われ、進歩の無い除草法を営々として続けている。

二十世紀の高度に発展した技術に、その陰で忘れてきたことは何か？ 二十二世紀へ目指すべき雑草防除の哲学は構築されているのか？ 除草剤の感受性に依存した形で雑草が残るのではなく、私たち人間にとって共存をはかる雑草を残存させる道具として、除草剤を有効に利用する技術を開発すべきではないか？ どの草を除草し、どの草を生かすかという観点で、人間の意志を反映させて、年々楽になる管理方法を目指して、植生を管理すべきではないか？ スーパーの野菜売り場で売っている野菜だけが食べられるのではなく、自分の身の周りにある雑草や山野草が、スーパーで手に入らない貴重な高級野菜であり、誰もが簡単に食べられ得ない価値ある食物であることに気づくべきではないか？ 雑草管理に求められる課題はつきない。